

資料

学生が抱く男性高齢者と女性高齢者のイメージ比較

岡田 恵子^{*1}

はじめに

老年人口が日本の人口構造を変え、その占める割合が年々高くなっている。それに伴い高齢者に対するイメージがしだいに変わってきた。

かつて社会は、老いを加齢とともに心身の能力や人格が、転がるように劣化する喪失と衰えの時としてとらえてきた。この否定的な概念の背景には、生産性第一主義の若さ偏重の社会で、人々が、生産力としてどれほど役に立つかという資質に価値を置いていたこと¹⁾、近代科学の敗北である非合理的な死や老いから目をそむけていたことなどがあげられる。基本的な焦点は、老化現象に関連して起こる機能低下や喪失におかれ²⁾、障害や病気を持ったり、施設、ナースホームに収容された高齢者の観察、研究が先行³⁾した。さらに調査内容も子どもや青年向けで高齢者には答えにくい偏ったもの⁴⁾であるなど、高齢者の正確な平均像はとらえられていなかった。このような状況では必要以上に衰退や喪失、病気や介護の不安や負担が誇張され、はっきり見てとれる老化現象にのみ目を奪われて否定的、固定的な老いのイメージがうえつけられやすかったと思われる。

エリクソンは、この「老化を病人になることだとする固定観念」⁵⁾を批判し、「老人差別の因襲の受容はその因襲そのものを現実のものとしてしまう」⁶⁾と警告した。B・フリーダンも「現実を歪め、高齢者の存在そのものを否認しなければならないほど、老いを恐ろしいものとしてしまった老いの神話」⁷⁾を受容するべきではないと強く述べた。

そのような中、高齢期が劣化の時代と言いきれないことは、その後のエイジング研究でしだいに明らかとなってきた。高齢期を成長、バイタリティ、精励、満足感を含んだ現象⁸⁾としてとらえる肯定的側面を取り上げたさまざまな研究がなされ、それらのことが実証されてきたのである。人格や英知は知能の低下がない限り、生涯発達していくという知見が現在エイジング研究のコンセプトとなりつつある⁹⁾。

今日社会が期待する高齢者像は、肯定的なものへと大きく変わってきたのである。

ではこうした流れの中で、これからの高齢社会を担う若者は、高齢者をどのように理解し、受け止めているのだろうか。看護の姿勢や質に、看護学生の高齢者イメージが影響を及ぼす¹⁰⁾と言われるように、今後高齢者とかわる福祉科学生を含む若者の高齢者像、つまり高齢者イメージを調査することは、より適切な福祉教育を実践し、正しく高齢者を理解したり、望ましいかわりを提供したりする上で意義あることと思われる。

今まで高齢者イメージの調査は、授業や実習の前後で高齢者イメージの変化を探り、それをもとに望ましい教育方法や内容を検討するという意図から¹¹⁾看護教育の中で多く行われてきた。しかし他の分野では、学生の介護体験や高齢者面接前後のイメージの変化、理想イメージと現実イメージの違いなどの研究があるもののあまり多くはない。いずれも社会的活動性、力量性などさまざまな次元の形容詞対を用いて、学生の高齢者イメージが肯定的否定的のどちらに近いかをもって実態把握を試みている。

しかしそれら形容詞対の調査では、実習前後のイメージの変化等ははかれるものの、学生の高齢者イメージの具体的内容や、高齢者にとって非常に重要な心理社会的側面、志向性、価値観など高齢者の人間的発達を学生がいかに関心しているかまではとらえがたい。従来の高齢者像が大きく変わろうとしている今日、高齢者の心理社会的発達の側面においても、学生がいかに関心しているのかさらに細かい調査が必要ではないかと考える。

もう一つの問題点は、いずれの調査も「高齢者」として男性高齢者も女性高齢者もひとくくりで扱っていることである。男女差を問題としない研究領域もあるが、元気高齢者のイメージなどは、所与の生物学的性差に大きく影響される。成人発達の父と言われるユングは、人間は誰も男性的特質と女性的特質をあわせ持ち¹²⁾、人生後半でそれらを補完、統合

*1 川崎医療短期大学 医療保育科
(連絡先) 岡田恵子 〒701-0194 倉敷市松島316 川崎医療短期大学

することが人間の成熟である¹³⁾と述べている。したがって、高齢者については男性的特質と女性的特質が統合されているというイメージを培うことが望まれる。しかし、実際の学生の男性高齢者と女性高齢者に対するイメージは違っており、性差にそって捉えているのではないと思われる。そこで、筆者は学生の高齢者像を男性高齢者と女性高齢者に分けてイメージ調査することにした。使用した尺度は、前回調査で使用した「自律・達成的価値と愛着・関係性価値尺度」¹⁴⁾である。この尺度は、「人との、あたたかい心の交流を大切にしたい」「人に負けず優位に立ちたい」「何事にも勇敢にチャレンジしていく」など性別にかかわらず、人間のあわせもつ男性的特質と女性的特質の表す心理社会的な具体的意識や価値観、志向性のあり様をとらえることができると考える。

研究方法

1. 調査対象者

県内のK大学2年生76名(男子27名,女子49名), S女子大学2年生142名, K看護専門学校2年生43名(男子1名,女子42名)の合計261名である。

2. 調査時期

2004年6月~7月

3. 調査内容

「人を喜ばせたり、人の幸せに少しでも役立つことがしたい」「自分の力や才能を人に認めさせたい」などの質問項目に対し、それらが高齢者がどのように感じていると思うか、そのイメージを①全く当てはまらない②あまり当てはまらない③どちらでもない④わりと当てはまる⑤よく当てはまるの5件法で答えてもらった。そしてそれぞれに1~5点を与えることにした。授業の中で、アンケート用紙を配布し回答を求め回収した。

4. 分析方法

各項目ごとに男性高齢者と女性高齢者のイメージ得点平均値を出し、t検定を用いて得点比較した。

また学生の持つ男性高齢者と女性高齢者のイメージを少数の類型に集約し、イメージの構成を見るため、主因子法による因子分析を行なった。その結果、男女高齢者とも9つの主因子が抽出されたが、男性高齢者に対しては因子抽出後、共通性が0.3以下の項目が2つあったのでそれらはずしてもう一度主因子分析を行った。その結果8つの主因子が抽出され

たが、男女高齢者ともプロット法により負荷量の高い上位5つをとりあげることにした。

結果

1. 男女高齢者のイメージ得点の比較

全項目ごとに男女高齢者別イメージ得点平均値を出し、t検定で比較してみると、4項目を除きすべての項目で $p < 0.0001$ で有意差が見られた。有意差の見られなかったものは「自分から進んで行動することは少ない(逆転)」「人の失敗を責めたり、非難しやすい」などであった。

2. 男女高齢者のイメージの構成

2.1. 男性高齢者に対するイメージの構成

第I因子は「人に対し、心のこもった態度をとるよう心がけている」「悲しんでいる人を見ると、平気ではいられない」などで、人と共感しあったりふれあうことを大事にするという他者への関心、思いやりの内容で「共感関係性」の因子と名づけた。第II因子は「人を押しつけても出世したい」「仕事の成功、勝利を何より目指している」など競争心や出世、名誉欲を示しており、「出世、名誉欲」の因子と名づけた。第III因子は「自分の目標を実現するために見通しを持って前進する」「自分は何をしたいか、確かな目標を持っている」など、自己目標を持って積極的に達成していく内容を示し、「目標、達成」の因子と名づけた。第IV因子は「納得できないことには妥協しない」「正しいと思うことは人にかまわず実行する」などで、自己の言動は他人に揺るがされないという「自己堅持」の因子と名づけた。第V因子は「すぐ弱音をはく方だ(逆転)」「まわりの人に頼りやすく、甘えたい気持ちが強い(逆転)」などで、「強さ」の因子と名づけた。

2.2. 女性高齢者に対するイメージの構成

第I因子は男性高齢者と重なる項目が多く、「共感関係性」の因子と考えた。第II因子も男性高齢者と重なっており、「出世、名誉欲」の因子と考えた。第III因子もほぼ男性高齢者と重なっており、「目標、達成」の因子と考えた。第IV因子も男性高齢者と似かよっており「自己堅持」の因子と考えた。第V因子は「進んで社会集団に溶け込み、人々と力を合わせて生きていきたい」「進んで人々の集まりに参加し、楽しく生きていきたい」などで「社会集団との交流、協調」の因子と名づけた。

表1 男性高齢者と女性高齢者のイメージ比較

質問項目	男性 高齢 者	女性 高齢 者	有意差
1 正しいと思うことは人にかまわず実行する。	3.91	>3.47	0.0001
2 人との、あたたかい心の交流を大切にしたい。	3.36	<4.13	0.0001
3 自分の目標に向かって正面から立ち向かっていく方だ。	3.61	>3.18	0.0001
4 自分の気持ちをありのままに話し、人と分かち合いたい。	2.86	<3.55	0.0001
5 高い地位や名声を得る人間になりたい。	3.56	>2.56	0.0001
6 人を喜ばせたり、人の幸せに少しでも役立つことがしたい。	3.28	<3.76	0.0001
7 納得できないことには妥協しない。	4.01	>3.51	0.0001
8 人の思いやりに触れて感激してしまうことがよくある。	3.26	<4.07	0.0001
9 相手にこまやかな心配りができる。	2.82	<3.77	0.0001
10 自分の力や才能を人に認めさせたい。	3.64	>2.85	0.0001
11 悲しんでいる人を見ると、平気ではいられない。	3.12	<3.74	0.0001
12 人生の問題や悩みを積極的に理解し、解決していく方だ。	3.09	>3.08	n.s.
13 人々と協調して生活するよう心がけている。	2.89	<3.61	0.0001
14 自分の意見や権利をはっきり言うのにためらいを感じる事が多い。	(逆転) 3.38	>2.84	0.0001
15 人の幸せや生活には、たいして関心がない。	(逆転) 2.99	<3.55	0.0001
16 まわりの人に頼りやすく、甘えたい気持ちが強い。	(逆転) 3.47	>2.82	0.0001
17 進んで社会集団に溶け込み、人々と力を合わせて生きていきたい。	2.92	<3.40	0.0001
18 仕事の成功、勝利を何よりも目指している。	3.57	>2.46	0.0001
19 相手の気持ちや立場を進んで理解し、受けとめたい。	2.87	<3.47	0.0001
20 日常生活の細かいことに配慮できる。	2.59	<3.77	0.0001
21 自分は何をしたいか、確かな目標を持っている。	3.41	>2.94	0.0001
22 人が何と言おうが、自分自身の考えに基づいて行動する。	3.89	>3.32	0.0001
23 人を押しつけても出世したい。	3.1	>2.11	0.0001
24 一度決めたことは、最後までくじけずやり通す方だ。	3.56	>3.15	0.0001
25 進んで人々の集まりに参加し、楽しく生きていきたい。	3.1	<3.82	0.0001
26 独立心が旺盛だ。	3.41	>2.73	0.0001
27 何かやろうとする時は、必ず相手の気持ちを考える。	2.84	<3.34	0.0001
28 人に負けず、優位に立ちたい。	3.52	>2.70	0.0001
29 適切な行動がとれるよう、冷静に考えて行動する方だ。	3.19	>3.07	n.s.
30 一度決めたことでも、人から何か言われるとすぐ気持ちが揺らいでしまう。	(逆転) 3.42	>2.92	0.0001
31 すぐ弱音をはく方だ。	(逆転) 3.65	>2.95	0.0001
32 自分から進んで行動することは少ない。	(逆転) 3.16	>3.02	n.s.
33 子どもや弱者をいつくしみ、世話をしたい。	3.11	<3.89	0.0001
34 人に対し、心のこもった態度をとるよう心がけている。	3.06	<3.72	0.0001
35 相手の地位や肩書きに応じて自分に有利なように態度を変える方だ。	2.98	>2.66	0.0001
36 何事にも勇敢にチャレンジしていく。	3.21	>2.85	0.0001
37 自分の目標を実現するために見通しを持って前進する。	3.27	>2.96	0.0001
38 人の失敗を責めたり、非難しやすい。	2.91	>2.82	n.s.

3. イメージ得点とイメージ構成との関連

3.1. イメージ得点平均が男性高齢者の方が女性高齢者より高い項目

これらは男性高齢者イメージの因子分析で抽出された、第II「出世、名誉欲」、III「目標、達成」、IV「自己堅持」、V「強さ」因子の項目群であった。また女性高齢者イメージの因子分析でも、第II「出世、名誉欲」、III「目標、達成」、IV「自己堅持」因子の項目群であった。

3.2. イメージ得点平均が女性高齢者の方が男性高齢者より高い項目

これらの項目は、男性高齢者イメージの因子分析では、第I「共感関係性」因子の項目群、女性高齢者イメージの因子分析では、第I「共感関係性」、V

「社会集団との交流、協調」因子の項目群であった。

考 察

1. 学生の高齢者イメージ

得点上、男性高齢者が女性高齢者より有意にイメージ得点が高い項目は、因子分析においては、「出世、名誉欲」「目標、達成」「自己堅持」「強さ」因子の項目群であった。逆に、女性高齢者が男性高齢者よりイメージ得点が高い項目は、「共感関係性」「社会集団との交流、協調」因子の項目群であった。トゥルニエは男性的特質を「力、権力の奪取、支配、成功、名誉、競争、達成、自律、強さ、合理的思考」、女性的特質を「人への共感、関心、理解、親しさ、深い関わり、配慮、情緒的欲求や弱者の尊重」¹⁵⁾などと

表2 男性高齢者のイメージに関する因子分析

質問項目	I	II	III	IV	V
人に対し、心のもった態度をとるよう心がけている。	0.684				
悲しんでいる人を見ると、平気ではられない。	0.627				
子どもや弱者をいつくしみ、世話をしたい。	0.592				
何かやろうとする時は、必ず相手の気持ちを考える。	0.579				
人の思いやりに触れて感激してしまうことがよくある。	0.544				
相手にこまやかな心配りができる。	0.542				
人との、あたたかい心の交流を大切にしたい。	0.53				
相手の気持ちや立場を進んで理解し、受けとめたい。	0.528				
進んで社会集団に溶け込み、人々と力を合わせて生きていきたい。	0.519		0.346		
人を喜ばせたり、人の幸せに少しでも役立つことがしたい。	0.515				
日常生活の細かいことに配慮できる。	0.485				
人々と協調して生活するよう心がけている。	0.45				-0.346
進んで人々の集まりに参加し、楽しく生きていきたい。	0.403				
人を押しのけても出世したい。		0.735			
仕事の成功、勝利を何よりも目指している。		0.685			
人に負けず、優位に立ちたい。		0.684			
相手の地位や肩書きに応じて自分に有利なように態度を変える方だ。		0.664			
高い地位や名声を得る人間になりたい。		0.637			
自分の力や才能を人に認めさせたい。		0.59			0.314
人の失敗を責めたり、非難しやすい。		0.346			
何事にも勇敢にチャレンジしていく。			0.728		
自分の目標を実現するために見通しを持って前進する。			0.614		
自分は何をしたいか、確かな目標を持っている。			0.537		
人生の問題や悩みを積極的に理解し、解決していく方だ。	0.314		0.431		
一度決めたことは、最後までくじけずやり通す方だ。			0.409	0.357	0.331
自分から進んで行動することは少ない。(逆転)			0.39		
自分の目標に向かって正面から立ち向かっていく方だ。			0.388		
正しいと思うことは人にかまわず実行する。				0.611	
納得できないことには妥協しない。				0.6	
人が何と言おうが、自分自身の考えに基づいて行動する。				0.504	
自分の意見や権利をはっきり言うのにためらいを感じる人が多い。(逆転)				0.49	
すぐ弱音をまく方だ。(逆転)					0.655
まわりの人に頼りやすく、甘えたい気持ちが強い。(逆転)					0.512
一度決めたことでも、人から何か言われるとすぐ気持ちが揺らいでしまう。(逆転)				0.391	0.447
因子の寄与率 (%)	12.323	9.307	7.022	6.49	4.384
累積寄与率 (%)	12.323	21.63	28.652	35.142	39.526

論じているが、これによると、学生は、男性高齢者は男性的特質、つまり男性役割で、女性高齢者は女性的特質、つまり女性役割でイメージしていることが推測できる。言いかえるならば学生は男女高齢者をステレオタイプ、つまり従来の性差による性役割でとらえていることが明らかになったわけである。

従来、人々は幼少期より社会規範に従って、性差によって異なる社会的心理的諸特性を学習し、青年期までに完成させる。成人期に入ると職業を持ち、配偶者と結婚し子どもを産み育てる。これらの過程で、もう一方の特性を抑制し、規範に従うためそれぞれの性役割を十分に機能させていくことが望ましいとされていた¹⁶⁾。学生は、その古典的規範に従い、性差で性役割を理解し、その延長線上に単純に男女高齢者をイメージ化しているものと思われる。

また各項目ごとに男性高齢者イメージ得点と女性高齢者イメージ得点を比較した結果、ほとんどの項目でt検定により $p < 0.0001$ で有意差が見られたことは、学生が心理社会的側面において、男性高齢者と女性高齢者を全く別の特性を持つ違った存在としてとらえていることを明らかにするものであろう。

この結果より、配慮なく男女高齢者をひとくくりにして「高齢者」と取り扱い調査、質問を行うことは問題があると言えるだろう。今後、高齢者調査は調査内容により慎重に行われるべきであると提言したい。

2. 今後の課題

学生は男女高齢者をステレオタイプで捉えていたが、今日ステレオタイプの一方に偏った特性だけでは人生後半期、幸福な老後を送れないことが指摘されている^{17,18)}。生産性、機能性重視の1900年代前半から、人生後半の重要性に注目していたユングは、ステレオタイプの一方に偏った特質だけを機能させるのでなく、人生後半で今までの自分の生き方や価値観を問い直し、自己の内面的欲求や本来の姿を見出すことによって自己の男性的特質と女性的特質を二特質を補完し、統合することが人間の発達、成熟であり、幸福な人生を実現する¹⁹⁾ことだと論じていた。ユングの言うように、人間の成熟、発達には男性的特質と女性的特質を補完させ合いながら統合し柔軟に使いこなしていくことが必要なのであろう。

この観点から言うと、ステレオタイプで捉えた学生

表3 女性高齢者のイメージに関する因子分析

質問項目	I	II	III	IV	V
人との、あたたかい心の交流を大切にしたい。	0.658				
人の思いやりに触れて感激してしまうことがよくある。	0.645				
人を喜ばせたり、人の幸せに少しでも役立つことがしたい。	0.643				
悲しんでいる人を見ると、平気ではいられない。	0.631				
人に対し、心のこもった態度をとるよう心がけている。	0.559				0.376
人々と協調して生活するよう心がけている。	0.538				
何かやろうとする時は、必ず相手の気持ちを考える。	0.484			-0.367	
相手にこまやかな心配りができる。	0.444				
相手の気持ちや立場を進んで理解し、受けとめたい。	0.44				0.41
子どもや弱者をいつくしみ、世話をしたい。	0.374				
自分の気持ちをありのままに話し、人と分かち合いたい。	0.329				
人に負けず、優位に立ちたい。		0.728			
人を押しつけても出世したい。		0.672			
高い地位や名声を得る人間になりたい。		0.611			
相手の地位や肩書きに応じて自分に有利なように態度を変える方だ。		0.611			
自分の力や才能を人に認めさせたい。		0.609			
仕事の成功、勝利を何よりも目指している。		0.608	0.38		
独立心が旺盛だ。		0.523			
自分の目標を実現するために見通しを持って前進する。			0.696		
自分は何をしたいか、確かな目標を持っている。			0.639		
一度決めたことは、最後までくじけずやり通す方だ。			0.514		
何事にも勇敢にチャレンジしていく。			0.417		0.326
自分の目標に向かって正面から立ち向かっていく方だ。		0.372	0.403		
適切な行動がとれるよう、冷静に考えて行動する方だ。			0.397		
人生の問題や悩みを積極的に理解し、解決していく方だ。			0.363		
正しいと思うことは人にかまわず実行する。				0.618	
納得できないことには妥協しない。				0.428	
人の失敗を責めたり、非難しやすい。	-0.307	0.361		0.363	
進んで社会集団に溶け込み、人々と力を合わせて生きていきたい。	0.317		0.313		0.493
進んで人々の集まりに参加し、楽しく生きていきたい。	0.336				0.442
人の幸せや生活には、たいして関心がない。(逆転)					0.423
因子の寄与率 (%)	10.551	9.631	6.774	4.358	3.84
累積寄与率 (%)	10.551	20.141	26.915	31.273	35.112

に、正しい高齢者イメージをいかに育てていくか、高齢者像理解のための適切な教育が課題となるであろう。

ま と め

福祉教育に役立てるため、学生の高齢者イメージはいかなるものなのか、また男性高齢者と女性高齢者に対するイメージは違うのではないかという問題意識から、今回男女高齢者の心理社会的な具体的意識や価値観、志向性のあり方などについて、学生のイメージ調査をした。その結果、学生は高齢者をステレオタイプ、つまり性差による性役割でとらえ、男性高齢者と女性高齢者を全く違った特性を持つ存在としてイメージしていることが明らかになった。今後、男女高齢者をひとくくりに「高齢者」として扱う問題点が指摘さ

れる。また高齢者イメージは、高齢者ケアや福祉にも多大に影響する大切なものである。しかし学生の高齢者イメージは、従来の固定的観念でとらえたステレオタイプであったことから、今後、高齢期の望ましい心理社会的変化や人格の統合発達などを理解させる教育が望まれる。人間の寿命の伸張を歓迎し、高齢期や高齢者の存在を肯定的にとらえようとする、人生の終焉までも見通した生涯発達観のさらなる構築²⁰⁾や福祉教育が今後必要な教育課題になると思われる。

本論文の作成にあたり、ご指導を賜りました川崎医療福祉大学医療福祉学科教授八重樫牧子先生に心より深謝申し上げます。また調査にご協力下さった学生の皆さんに感謝いたします。本当にありがとうございました

文 献

- 1) 高橋恵子, 波多野諄余夫: 生涯発達の心理学. 第11版, 岩波書店, 東京, 1-13, 19-205, 1990.
- 2) 谷井康子: サクセスフル・エイジングの概念分析. 日本看護科学会誌, 21(2), 56-63, 2001.
- 3) B Friedan: THE FOUNTAIN OF AGE. New York, 1993. (山本博子, 寺澤恵美子訳: 老いの泉上. 初版, 西村書店, 東京, 127, 1995.)

- 4) 前掲書 3) 105
- 5) Erikuson EH, Erikuson JM and Kivnick HQ: *VITAL INVOLVEMENT IN OLD AGE*. W.W.Norton & Company, New York, 1986. (朝長正徳, 朝長梨枝子訳: 老年期 —生き生きしたかわりあい—. 第3版, みすず書房, 東京, 359, 1990.)
- 6) 前掲書 5) 328
- 7) 前掲書 3) 35
- 8) 前掲書 2)
- 9) 柴田博: サクセスフル・エイジングの条件. 日本老年医学会, **39**(2), 152-154, 2002.
- 10) 大谷栄子, 松木光子: 老人イメージと形成要因に関する調査研究(1) 大学生の老人イメージと生活経験の関連. 日本看護研究学会雑誌, **18**(4), 25-38, 1995.
- 11) 古城幸子, 木下香織: 老年看護学の授業による学生の高齢者イメージの変化 第1報 老年看護学Iの授業評価. 新見公立短期大学紀要, **23**, 53-60, 2002.
- 12) Jung CG: *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewussten*. Zurich, 1933. (野田あきら訳: 自我と無意識の関係. 第11版, 人文書院, 京都, 1982.)
- 13) Jung CG: *Über die Psychologie desurich*, 1948. (高橋義孝訳: 無意識の心理. 第16版, 人文書院, 京都, 1977.)
- 14) 岡田恵子, 田中宏二: 成人期および老年期における自律達成的価値と愛着関係性価値の発達, 統合について. 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 153, 1997.
- 15) Tournier P: *La mission de la femme*. 1979. (山口實訳: 女性であること —パーソナルな世界の豊かさ—. 第14版, ヨルダン社, 東京, 1981.)
- 16) 湯浅隆子: 高齢者のジェンダー特性とサクセスフル・エイジング —予備的検討—. 奈良大学紀要, **32**, 135-157, 2004.
- 17) 下仲順子, 中里克治, 本間昭: 長寿にかかわる人格特徴とその適応との関係 —東京在住100歳老人を中心として—. 発達心理学研究, **1**(2), 136-147, 1991.
- 18) Singer J: *ANDROGYNY Toward a New Theory of Sexuality*. New York, 1976. (藤瀬恭子訳: 男女両性具有 —性意識の新しい理論を求めて— 初版, 人文書院, 京都, 1982.)
- 19) 前掲書 13)
- 20) 前掲書 16)

(平成17年5月10日受理)

Comparison of Student Images of Elderly Men and Women

Keiko OKADA

(Accepted May 10, 2005)

Key words : image of elderly, elderly men, elderly women, stereotype, life-span development

Correspondence to : Keiko OKADA

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied,
Health Professions

Kurashiki, 701-0194, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.1, 2005 283-288)